

書評

小茄子川歩著『インダス文明の社会構造と都市の原理』

上 杉 彰 紀

小茄子川歩 著
『インダス文明の社会構造と
都市の原理』

上杉彰紀

はじめに

本書は、南アジア西北部に展開したインダス文明（西暦紀元前2600～前1900年頃）を対象として、都市がもつ社会的特質を明らかにしようとする研究である。都市という社会的・物理的空間は人類社会を特徴づける重要な要素の一つであり、都市社会の形成過程は広く人類史研究の関心事である。考古学においても重要な研究課題であることはいうまでもない。

1920年代に行われたモヘンジョダロ遺跡とハラッパー遺跡の調査によって、都市と文字をもつ南アジア最古の文明社会の存在が明らかにされて以降、インダス文明研究は南アジア考古学を牽引してきたが、その中で都市遺跡の調査・研究が中心となってきた経緯がある。

特に1960年代以降、少数ながら日本人研究者もインダス文明研究に関心を寄せてきた。その中でインダス文明に関する書籍も刊行されてきたが、一人の研究者が一貫した学問的関心と方法論によって、概説書ではなく研究書としてインダス文明に踏み込んだのは本書が最初といっても過言ではない。著者の小茄子川氏に敬意を表したい。

1. 本書の構成

まず本書の構成についてみておこう。

序章 本書の目的と方法

第1章 都市はどのように考えられてきたか

第2章 都市を考えるための諸側面

第3章 モヘンジョダロの創出

第4章 ハラッパー式彩文土器の創出

第5章 インダス式印章の「発明」

終章 インダス文明の社会構造と都市の原理

まず、序章では、従来の都市の起源に関する考古学的研究においては、農耕社会の成立に始まる連続的社会発展の中で都市が誕生したという「社会進化論的」歴史観が中心であったが、それでは都市の成立を説明できないという論点が強調される。それを受けて、第1章ではこれまでの考古学における都市研究が概観され、人類学・社会学的視点の参照をもとに、著者の都市形成に対する研究視点が述べられている。特に「市」という都市の経済機能の重要性が指摘される。さらに第2章では、そうした都市の経済機能を重視する立場から、インダス文明を含む南アジアにおける交換様式が概観され、インダス文明以前の社会の様態について検討が加えられている。

第3～5章が具体的な考古学的事象の分析である。第3章ではインダス文明を代表するモヘンジョダロの都市形成過程が「創出」という用語を用いて考察される。インダス文明期に都市として発展したモヘンジョダロが、文明期以前には人の生活領域ではなかったインダス川の氾濫原に「突如」として出現したことや、小規模な村落から長期間にわたる発展段階を経て都市へと成長したわけではないことが強調され、この都市が前2600年頃に広域的な交易活動の中心地として創り出されたことが指摘される。

第4章ではハラッパー式彩文土器が同じく「創出」という視点から検討される。これまでの研究では、インダス文明期を特徴づけるハラッパー式土器は先文明期に展開したコート・デージー式土器が発展して成立したと考えられてきたが、彩文に着目するとコート・デージー式土器からの漸移的發展ではハラッパー式土器の成立過程を理解することはできず、むしろインダス平原の西側に位置するバローチスターン地方の彩文様式の要素が取捨選択・再編されて、ハラッパー式彩文様式を生み出していることが指摘される。その上で、ハラッパー式彩文様式は都市を拠点とする文明社会の成立時に、そのシンボルとして「創出」されたという解釈が提示される。

第5章では印章が取り上げられる。先文明期に

は幾何学文印章がインダス平原からパローチスターン地方に分布していたが、文明期になると、それとはまったく異なるインダス式印章が出現し、広域に分布するようになる。すなわち、幾何学文印章とインダス式印章の間には断絶があり、ハラッパー式彩文様式と同様にインダス式印章が文明社会の成立時に「突如」として生み出されたシンボルであることが論じられる。

終章では、前4千年紀後半から前2千年紀前半にかけての社会変化について、特に交換様式の変化という視点から考察されている。その過程を、都市をもたず互酬性交換を基本とする段階（前4世紀後半）から、互酬性交換が卓越しながらも定期市として発達した都市的集落を介して少額「貨幣」を用いた限定的な商品交換が萌芽する段階（前3千年紀前葉＝先インダス文明期）、市場として発達した「都市」の建設、新たな原理に基づく社会を正当化し調整するための「伝統」の創出、おもり、印章の広範な分布に示される価値基準の出現と「貨幣」に基づく商品交換などを特徴とする段階（前3千年紀中・後葉＝インダス文明期）、都市が消滅し再び互酬性交換が基本となる段階（前2千年紀前葉＝ポスト・インダス文明期）という変遷で評価する。その上で、都市を「無縁・商品交換・市場」「中心性・集約性・創造性」の場と位置づけ、その成立は発展段階的図式では説明できないと結論づけられている。

2. 本書の特徴

本書の特徴は、何よりも都市の起源が自然発生的あるいは社会進化論的な枠組みでは理解できないという主張にある。すなわち、農耕社会が順調に発展した帰結として都市が誕生するという通説的理解に対するアンチテーゼの提示と、その視点に基づいたインダス文明社会における都市の位置づけの模索である。その視点の構築には南アジア考古学だけでなく、さまざまな地域・時代の考古学研究成果や社会学・人類学の成果が随所に参照され、都市がもつ商品交換を主体とした経済的機能がそれ以前の村落社会の互酬性交換とは断絶

したものであること、その断絶は社会進化論的な視点では理解できないことが強調される。

都市社会がその出現以前の社会とは大きく異なるものであり、都市社会を支える諸々のシンボルの「発明」あるいはその総体としての新たな「伝統」の創出を伴うものであるという主張は、都市あるいは都市社会がもつ性格や原理を浮彫にするものであるし、「生産様式」ではなく「交換様式」に着目する視点は、都市形成という歴史事象に対する漠然とした自然発生的説明から脱却し、その実態に踏み込んだ解釈を可能にするものである。

また、インダス文明の都市に関する具体的な考古的事象の考察においても、数多くの先行研究が参照されるとともに、それらの成果を積極的に統合しようとする試みがなされている。これまでのインダス古河道の復元研究をもとに、モヘンジョダロが築かれた場所が「中洲的」な未開の地であったとし、そこにモヘンジョダロの都市が築かれたことの意味に着目する視点は興味深い。そうしたしがらみのない未開地が新しい文化伝統を生み出す社会的空間として、また価値基準の創出をもとにした商品交換を主体とする経済的空間として機能したという指摘は、都市というそれまで存在しなかった社会的中心地が建設されることの意義を考える上で重要であろう。

その上で小茄子川氏は都市をその他の集落と区別するための分類基準として、「①その空間が、既存の伝統文化という「しがらみ」のない「無縁」の地に、短期間のうちにきわめて作為的に創られたものであるか、②その空間に、互酬原理からの脱却を志向した本格的な商品交換に基づく常設市場としての性質をみとめるか、③その空間に、「貨幣」を一定の範囲において通用させるために必要な、共通の価値基準となる新たな「伝統」の創出という事象をみとめるか、④その空間に、「互酬原理と市場交換原理の差異を親和的・双方向的に「同調」させる自律的な機能」をみとめるか」という、従来の考古学における都市の定義とは一線を画した基準を提起していることも、都市の出現の内実に切り込んで説明しようとする氏

の一貫した視点を明示している。

3. 本書の問題点と今後の課題

このように本書は多くの示唆に富む一方で、いくつかの問題を内包している。まず研究視点についてみておくと、「都市」と「都市社会」が混同されている点である。都市の出現という事象に着目すれば、村落から町邑、都市的集落を経て都市へといたる連続的發展ではなく、ある政治的・経済的条件下でごく短期間に都市が建設される可能性は高い。むしろ歴史的にみれば、そうした都市の方が多だろう。しかしながら、都市の出現・存立を可能にする社会という視点でみれば、やはり都市の出現に先行する時期における社会的基盤の醸成が不可欠である。モヘンジョダロがそれまでに利用されていなかった氾濫原に突如として出現したことが仮に事実だとしても、その周辺地域に都市の出現・存立を可能にする社会的仕組み・基盤がなかったとしたら、モヘンジョダロに都市が建設される意味は見出せなくなる。既存の地域社会の枠組みの再編がインダス文明期の「伝統」を生み出しているという小茄子川氏の説明は、都市出現以前の地域社会と出現後の都市社会の一種の連続性を示しているのではないだろうか。

チャイルドに始まる「都市」の定義も、むしろ考古学的現象の個別的検討から導き出された「都市社会」の定義として理解されるべきであろう。その視点に立てば長期的な視座で都市社会の形成過程を評価することも可能であろうし、段階発展的な説明が一定の有効性をもつことも明らかである。換言すると、小茄子川氏が繰り返し批判する社会進化論的理解は、氏の主張とはそもそも拠って立つ時間スケールや説明の視点・論理が根本的に異なっていると考えられる。

長期的にインダス地域における都市社会の形成過程を俯瞰すると、前4千年紀後半以降に沖積平野の開発が進行し、各地の地域社会が結びついて広範な地域間交流のネットワークが形成されたことが、インダス文明期の都市社会の基盤となって

いる。それは小茄子川氏が考察する「都市の創出」と決して矛盾するものではないのである。

また、本書で取り上げられたチャイルド、ピータック、コニングハムによる都市の考古学的定義を「社会進化論的・発展段階的」として一括りにして批判の対象とするのは、メソポタミア、エジプト、南アジア各地に展開した都市社会の考古学研究から導き出された成果を単純化しすぎているだろう。小茄子川氏の主張の論点は十分に理解できるが、先行研究をやや無理にひとまとめにして否定的に評価している感が否めない。

また、モヘンジョダロの都市空間、ハラッパー式彩文土器、印章の分析においても、社会進化論的都市論を否定する結論へと結びつけるために、考古学的事象のある側面だけを取り上げて一般化する傾向が見受けられる。紙幅の関係で個別の詳細な批評は省くが、モヘンジョダロがインダス文明最古の都市であるのかどうか、ハラッパー式彩文様式やインダス式印章の出現がモヘンジョダロにおける都市建設と共時的であるのかどうかなど、研究の現状で不確実性が高い事象を仮説の積み重ねで補う小茄子川氏の論理展開には資料の制約や研究の現状では相当に無理な飛躍があることを記しておく。

インダス文明のみならず、南アジアの考古学は遺跡の調査件数や精度、また調査成果の詳細な報告例が著しく限られているという深刻な問題を抱えている。また、考古学研究の根幹ともいえる編年軸の構築が著しく停滞しているのも実情である。インダス文明の社会像やその評価についても限られた遺跡の資料をもとに論じられているのが現状で、旧説が硬直的に定説化しているケースも多い。そうした中で大胆な仮説の提示と既存資料の再解釈は現状を打破し、研究を前進させる上で不可欠であろうし、本書はそうした試みとして評価されるべきであろう。その一方で今後の分析資料の蓄積と基礎研究の推進による研究が不可欠であることも指摘しておきたい。

(2016年 B5判 256頁 同成社 9,000円+税)